

カメラの性能向上で 新しい形の写真館を模索

貴重な歴史の一コマを後世に残す写真

尾張藩14代藩主の徳川慶勝は写真好きであったことでも知られています。現像用の薬品を自ら調合し、身近にいた家来から名古屋城、江戸屋敷、祭や町の風景まで、彼が撮った写真は1000点も残され、貴重な歴史の資料となっています。

その頃の写真はフィルムに感度が悪く、長時間露光しなければ撮影ができませんでした。現像、プリントをおこなうための薬品も自分で調合してつくりました。高価な撮影機材を使い、高度な撮影技術が必要とし、さらに化学などの知識も必要でした。当然、庶民にとって写真は気軽に撮ってもらえるようなものではなく、個人や家族にとって大切な記念となるものでした。写真撮影のためには設備の整った写真館まで出かけるのが当たり前でした。

これまで以上に重要なセンスと演出

戦後、写真機やフィルムの技術革新が進み、多くの方がカメラをもつようになると、写真館まで足を運ばなくても、気軽に写真撮影ができるようになりました。しかも白黒写真からカラー写真になり、い



まではデジタルカメラが当たり前になっています。プリントから露出やシャッター速度の調整など、全てカメラが自動的におこなってくれます。さらにコンピューター上で色補正などさまざまな修正が可能となり、フィルムのような現像や修正技術は必要がなくなってきました。その結果、プロは技術以上にセンスが求められるようになっていきます。いまでは写真館だけでなく、結婚式場や学校行事、各種イベントなどに出かけて撮影をする写真師が大半を占めています。プロの写真師は単なる記録ではなく、その場の雰囲気や、そこにいる人の人格をも写し取ります。写真館ではその人や家族のニーズに合わせた演出ができるよう、家庭では揃えるのが難しいオリジナルな小道具を用意するところが増えていきます。写真館のあり方も時代と共に変化しつつあるようです。



DATA ■名古屋写真師会

所在地：昭和区藤成通 4-10 写真のみくに内

- ・明治4年：名古屋に初めての職業写真師誕生
- ・明治24年：名古屋写真業組合発足。名古屋写真師同業組合、名古屋写真師会とも名乗る
- ・昭和17年：名古屋写真師協会と合併し名古屋写真商業組合
- ・昭和18年：西三河写真商業組合と合体し愛知県写真師商業組合
- ・昭和59年：協同組合愛知県営業写真家協会
- ・平成元年：名古屋で開かれた世界デザイン博覧会で来場者の記念撮影